

ピアスのトラブルを 50%から55%以下に 減らした専門クリニック

皮膚科・形成外科 高橋医院(東京・渋谷) ●高橋知之先生

女子高校生の3〜4割、男子高校生の1割——首都圏のある県で調べたピアス愛好者の比率です。ピアス人口の急増に伴い、かぶれたり化膿したりといったトラブルに泣く人も少なくありません。はからずも、そんな人々の救い主になったのが、もとは癌研究会附属病院勤務の外科医だった高橋知之先生です。



「ピアスを外して皮膚炎が治っても、患者さんは満足しないのでは」と語る高橋先生



ピアッシング(穴開け)は専用のピアスガンで一瞬のうち、このよま、ピアスホールが完成するまで、純金ないし純チタン処理を施したピアス(医療用スタッド)を適用する。

ピアスをはずして トラブルが防げたとしても…

■もとは癌研勤務の外科医 癌研にいた当時、乳房再建術に興味を持ちましたね、一般外科から形成外科に転向し

語られるまま診てみたら、開けた穴の内側が膿んでいて、これでは耳たぶの表面にクスリを塗っても治らないのは当然ということで、膿を出し、シリコンのドレーンを穴に通して輪を作り、抗生物質の軟膏を塗ってみました。

ええ、この輪を動かすことによって、内側の創傷にクスリが触れるように工夫したわけです。外科医としては常識的な処置ですが、患者さんには思いのほか喜ばれましたね、そのうち、口コミで患者さんが増え、自分というもなんですが、門前市をなすようになってという次第です。

■ピアス皮膚炎との闘い そのうちに、「ピアスの穴を開けてください」という人が増えてきました、さてどうしたのかかと思いましたが、「断っても自分で開けるだろう」と考え、引き受けたのが7年ほど前です。最初は注射針で穴を開け、傷口が治るまで、前述のようなシリコン製のリングピアスを使ってもらっていました。

その後、試行錯誤を繰り返して、現在では、表面に純金ないし純チタン処理を施したピアスを、専用のピアスガンで一瞬のうちに打ち込むという方法をとっています。このピアスは、骨折のときに使うネジと同じ材質のステンレスでつくった医療用具(スタッド)で、実は私が開発したもののなのです。

■ついには会社を設立 多くの患者さんを診るうち、ピアス皮膚炎の発生にはピアスの形状と材質、アフターケア

が関係していることがわかりましたね、いろいろなメーカーさんに、トラブルを防ぐ製品の開発を依頼しましたが、どれも引き受けてくれませんでした。

結局、自分でやるしかないと、ピアスガンやスタッド、アフターケア用のジェルを製造・販売する会社の設立に踏み切ったわけです。目下、この会社の製品をお使いいただいている開業医の先生方は、全国に500〜600人ほどおられます。

こうした先生方には、私のノウハウを提供し、診療に生かしていただいているわけですが、一般の方が自己流でやれば、50%近くに発生しかねないピアス皮膚炎が、5%以下に抑えられているのが現状です。

■成人女性の3分の1 某県で調べたところ、県立高校の女子の3〜4割、男子の1割がピアスをしているということです。成人女性の、ほぼ3人に1人はピアスを楽しんでいます。私のところにも、生後6か月の女児から80代のおじいちゃんまで、幅広い年齢層の皆さんがいらっしやいますよ。

こうした人々が、自己流で穴を開けてトラブルに見舞われたとき、医師から「ピアスを外しなさい」といわれたら…。恐らくは、ピアス皮膚炎が治ったところで満足はしないと思います。ピアス皮膚炎が急増しているいま、先生方には、そんな患者さんの心理にも、意を用いていただきたいと思うのですが、いかがでしょうか。